

# ハトビの記録帳

s0966109

7月20日 晴天

---

暑かった。

それは目の前の白い空間さえ暑苦しく思える程。いっそのこと、私の大好きな空色のペンキをバケツたっぷりに入れて、白い壁やベッドシーツを全て染めてやろうと、そんな衝動が駆け巡るほどであった。

窓の外でジリジリと蝉が叫ぶ。木の茶色と一体化していて、叩き落そうにも見つけることなど出来ないだろう。

本当、やかましい。

私の名前は西城 叶（さいじょう かなえ）。

まだまだ青春まっしぐらの最中であるはずの中学3年生である。しかも受験生とも言う…。

そんな歳であるのに何だ。

真っ白な壁紙に真っ白な天井に床、真っ白なベッドが1台。

純白で汚れの見えやすい空間に私がいる。もう埃とかよく見えるけどちゃんと掃除しろと言いたい。

つまり私は事故を起こしてしまったのだ。

——コンッコンッ

そんなこと考えていると、不意に病室のドアが乾いた音立てた。

私ははっきりとした声で返事をすると、ドアはスライド式に開き、ノックした人の正体を現す。

「見舞いに来たよ叶！」

「結衣、来てくれたんだ。」

入室したのは短い茶髪で可愛らしい大きな瞳を持つ少女が来た。

夏間近である為、黒のタンクトップに細く短いジーンズ姿で、とても涼しげである。

学校へ持参する学生鞆は見て確認出来たが、何だか中身が軽そうであったし、反対の腕には見舞い品らしき紙袋が見えた。

彼女とは中学入学当時から意気投合して、よく行動を共にして楽しく過ごしてきたものだ。

そんな同級生は坂木 結衣（さかき ゆい）と言った。

結衣は学校からの帰りであるはずにも関わらず、あまりに大胆な私服に一瞬自分の目を疑った。

まさかこんな格好で学校に行った訳じゃないよねまさかまさか…。

「何よ、私の服をまじまじと見て。」

そう怪訝そうな顔をした結衣ではあったが、何かを思い出したように「あー」と声を漏らした。

すると勢いよく目を輝かせ、ぴんと背筋伸ばし威張るようなポーズをとった。

まさかまさか…。

「叶、早く怪我治しなさいよね。退院祝いとして海に行く企画もあるんだから！」

夏休みであった。

「退院したらお花見に行く企画がある」とか言われたこともあるけど…。  
あの企画は一体全体どうなったのか、未だ結衣の口から知らされたことはない。  
今回もこのような流れになったら、ちょっと嫌だな…。

夢の出来事であったようにも思える。

そう思うからと言って、私が負った怪我は完治することはないと承知しているが…。

しかし、現実では有り得ないような、そんな日を今でも鮮明に思い出す。

病室に送り込まれた瞬間メルヘンチックな一日は本当の夢となって消えたけれども。

要らんとところで現実になるとか、もうちょっと逃避させてもらえないのかな…。

私が住む街では、国内でベスト一桁に入るほどの、大きな最寄駅がある。

大きいとなると、そりゃまた人の賑わいも半端ないし調子に乗って生えてきたビルも多い。

クリスマスになればカップルがイチャイチャする人倍増だし、世間が長期休暇に入った時は交通麻痺が容赦なく報道される。食べ物も美味しいし、だけど私たち学生には厳しいお値段。高級店がかなりの数立ち並んでいる。

賑わいはとっても温かいくせして、人の目が冷たいのは仕様。

流石都会！この駅の利用者も分かっているね！

普段私はこの駅を利用することはほとんど無く、いつまで経っても道や店の場所を覚えられないものだ。同じようなビルと無数に枝分かれする道路。

結衣曰く、「特徴あるビルを中心に覚えていくと良いよ」と、駅周辺には二日に一回訪れる地元マニアからアドバイスされたが、全部同じようにしか見えない。

そんな私が最後に駅へと訪れたのは、もう4か月前となる。

あの時は確か、桜を見にフラフラと立ち寄っていた。お日様が優しく照らす3月の春。

駅周辺には相変わらず人混みが激しく、無言で肩にぶつかるぐらいじゃ可愛いもの。

吸っているタバコの火が小さな子供に付くこともあるし、夜になればもっと酷い。

警察も四六時中忙しそうに動き回ったり、酔っ払いに絡まれたり、パトカーも近所迷惑な程騒ぎたてる。暇人で退屈に感じている人は、警察官を夢見て懸命に勉強する人もいるそう。

そう、所詮は夢で現実とはかけ離れているのだ。私たちが思う甘ったれと実際の出来事は。

しかしそんな甘ったれな考えも誘惑するように、私たちが飲み込むことがある。

それが、『非現実的』な出来事。

「お母さーん、あのハトさん綺麗だよー。」

「ゆうちゃん、全身灰色なのに綺麗なハトさんが居る訳ないでしょう。」

「本当だもん！コップみたいに透明人間のようハトさんがいたもん！」

「何訳分からないこと言っているのゆうちゃん、ハトさんは全身灰色なのよ。」

私は、人混みから避難する為に公園へ逃げ出せば、このような会話が飛んできたものだ。

親子で激しい討論を、しかしそれも妙で可笑しな話となっていた。

しかし母が言うことは「ハトが全身灰色」であることだけ主張して、可哀そうなことに飛べる鳥と言うことは触れていない。って部外者の私が突っ込むのもなんだけれども。

その会話を聞きながら、細く微笑んでいるとやがてその表情も凍りついた。

気がした。

一瞬何が起こっているのか分からなかった。

確かに、「ゆうちゃん」が言うように、ガラスで作られたようなハトが、自分の足元にある地面を突っついている。完全に見えない訳ではなく、日光を反射して眩しく輝いている。

しかし、たった1羽であるならまだ珍しいって思える。

そうだ、何匹も…まるでこの世界中で呼ぶ「ハト」がガラスで作られていると、常識に塗り替えたように無数のガラスのハトが、のほほんとポツポツ言いながら歩いているのだ。

私が事故に遭った原因は、そのハト達であった。

ポッポッポットのほほんとした顔を(しているのか分からないが)歩く姿が、私の目に映る。太陽の光に反射し、白く光るそのハトはハトと言えるのか怪しくなるほど。

つまり「ゆうちゃん」が言うように綺麗であるわけなのだが。

それにしても可らしい…親子の様子を見ていると、どうやら私と「ゆうちゃん」にしか見えてないようであった。

それはただ単に不思議とか、非現実的とか、あり得ないことを意味する言葉が浮かぶ。が、何故かその時、私には違ったように見えた。

——ポッポッポッ

透明なハトはまるで幽霊のようにも見える。

元々この公園にはハトなどが集えるような、そんな環境ではない。人も、今日は親子がたまたま散歩やらに來ただけであるようだが、ベンチも滑り台もブランコも公園の雰囲気を出すものなど何もない。気が生えているぐらいが公園だなんて決めた偉い人も何を勘違いしているんだ…。

とにかく、ハトがこんなにも集まるのもまた不思議に思える訳ではあるが。

呑気に歩くハトを見て、私はぶっちゃけどうでもよくなってきた。

しかし、その時自分はどんな行動を起こしたのか、まるで覚えていない。

気が付けばこの白い空間に居て、事故原因は道路飛び出しで全身強打したとか云々…。

もうその時の私の精神はどん底で、医者の話なんて頭に入っていない。どうでもいい話だけ良く頭に入るのは私の悲しい性質って言うか、脳がどうかしているのだろう。

母は涙流しながら何事かと言わんばかりに大声出して飛んでくるし、父は加齢臭撒き散らしながら抱きついてくるし、何が何だか分からなかった。寧ろ私は迷惑そうに顔をしかめた覚えがある。

「暇だなあ。」

ぼんやりとしながら誰もいない、ただ私一人いる病室の天井を見上げた。

もうこの生活も大分慣れた方だが、やはり何もやる事が無いとなると、時間が勿体ない。

その時私は自分の記憶にぽっかりと穴空いた時の、過去の私に恨めしく思うように呟く。

結局それを言う「自業自得だろ」と済まされるものだが、私には納得いかなかった。

——コンッコンッ

ドアのほんの少しの隙間から見えた姿に、私は思わず自分の目を疑う。

とりあえず返事をして入室させたが、内心はパニックに陥っているものである。

入室してきたのは、あの事故に遭った日に居た子供だったのだ。

子供と言っても、私も子供の部類に入ると突っ込みを入れたいが、正直そんなことを考えている余裕などなかった。

しかし何より、何故声もかけていなかった私を覚え、この病院に運ばれてきたのかも知っているのか、この子供が私に大した用でもあるのか…。様々な疑問が頭に過るが、そんな質問攻め出来る状況では、なかった。

その子供は確かお母さんから「ゆうちゃん」と呼ばれていた。

おかつぱで黒く、サラサラとした髪。一見男の子か女の子か迷うところではあるが、名前から

して多分男の子なのだろう。

顔は今の時期、外にほっぴり出せばすぐに焼けそうな、子供らしい桃色の肌。  
服はアニメがプリントされた白いTシャツに、動きやすい青色の短パンを履いている。  
蝉が窓側でやかましく鳴いているところ、日の光はサンサンと照らす。  
それは戸惑っている私にでもあり、照れ臭そうに笑顔を浮かべている男の子にでもある。

「えっと、初めまして。ぼくのお名前は？」

私がそう訊くと、男の子は実に嬉しそうに目を輝かせた。

「ボク、ハトビ！」

…いやいやいやいや、ゆうちゃんの原型留めてないよ君。

私がハトビと呼ばれる男の子にそう突っ込もうとしたが、その口も閉ざされてしまった。

男の子が持つ物に、今初めて気が付いたからだ。

それは白い鳥籠であり、その中には日光の光を吸収したように光る、透明なハトがいた。  
無論、見覚えのあるハトだ。事故の前に、確かに私は見たのだから。

「お姉ちゃん、ボクを助けてくれたんだよね！」

「えっと…。」

そう言われて困ったものだった。

何せ、その当時の記憶がまるで穴空いたように、すっぴりと抜けてしまっている。

だから助けたものが男の子であるか、それともお母さんであるか。いや、もしかしたら私は何も助けず、飛び出して交通事故に遭ったのかもしれない。

もし後者であるなら、今すぐにでも墓穴に埋もれたい…。

「ボクだよ、この透明なハトはボクなんだ！」

10秒、もしくはそれ以上かもしれない。

それほどの間、窓では蝉がやかましく鳴き、病室では気味悪い沈黙が流れた。

もう、沢山書きすぎて、それほど暇過ぎて疲れたから、また明日書こう。

7月23日 晴天

---

ボクには家族が居る。

ボクと一緒に行動している(正確に言えば体を借りている)、お母さんからは「ゆうちゃん」と呼ばれている、勇太君はボクの家族だ。

あと、勇太君にはお兄ちゃんがいる。

とても背が高いと言う印象だけれど、ハトであるボクをよく可愛がってくれる、優しいお兄ちゃんだ。

そして、先ほど会った叶さんはそんな幸せなボクを危険から守ってくれた、助けてくれた。

ボクはそれが、とても嬉しかったんだ。

ハトビと名乗る少年は、元々ハトの姿であると言った。

そう、ハトビはこの日本、都会(東京)で不思議な力を使うことができるのだと言う。

そりゃ外に漏らしたら大変なことになるだろうと、私はそう思ったのだがいつの間にか顔に出ているらしく。

「大丈夫だよ、皆信じないから。」

っと笑って、さり気なく悲しいことをさらりと言ってのけた。

しかし私は信じる。…っと決めたことではないが、何故かハトビが言うことは嘘が無いように聞こえたから。

絶え間なくきらきらと輝かせる瞳には、無邪気さばかりが見えて、邪気なんてものがない。

たまに子供だって、悪戯心が芽生えるものだが、それは退屈な日々を覆す為なのではと考えたものだ。

って、そう考える私はさり気なく子供好きであったりする。

ハトビの力は実に様々であると、可愛く偉そうにして自慢した。

今の状況のように、眠っている子供の体を借りることが出来るとか。(正確に言えば意識を乗っ取っているらしい)

他には透明なガラスのような姿を完全に消して隠れたり。

ハトビ自身が許した人には、不思議な力を授けることすら出来るらしい。

さらりと書いたものだが、本当は「日が暮れるんじゃないか」と思うほど話は長かった。

ハトビが入室した時は真昼だったと言うのに、もう太陽は15度ぐらい傾いたんじゃないかな…

。

そんなゲームのような、RPGのような力が使えるハトビは、私に何か用があるのか。

「叶さん、ボクの家族になって下さい！」

「……………」

いくらなんでも単刀直入すぎる用事であった。

それもさり気なくとんでもないこと言っている。

まだ「お友達になって下さい！」だったら、「あら可愛い子」ってなるけれど。



「家族になる」と言うことは、付き合っで結婚して子供産んでの家族となる。  
考えすぎだろうが！と突っ込まれそうではあるが、当時の私は真面目にそう考えていた。  
ただ、一つだけ聞いて判断してみようとは思った。

「ハトビ君の家族になる基準って言うものはあるのかな？」  
って、そんなこと聞こうと思ったんじゃないよ私。  
って、ハトビはまるで私が「Yes」と答えた時のように満面の笑みを浮かべているし。  
待て待て、まだ私は返事してないわよ。

「ボクの家族は、皆他の人を親切にしてくれる人なんだ！」  
ハトビは元気な声でそんなことを言えば、それを聞いた私は思わず脱力してしまった。  
それなら、特に構わないような用件であるように思い、私は口を開いた。

「いいよ、ハトビ君の家族になっても。」

そうだ。  
私はこの時からまた。  
おかしい出来事に遭遇すると言うことは。  
どこかしら、想像出来ていたのかもしれない。

7月24日 晴天

---

長く付き合っていた白く退屈な空間も今日でおさらば。

意識が戻った時は、流石に全身強打した為激痛が駆けていたものだが…。

この日起きると、医師から唐突に一言「退院おめでとう」と言われたのだ。

いつ退院出来ると言う話はまるで聞いていない。

寧ろ未定だとか回復が遅いなんて言われていたのに、あまりにも唐突過ぎると私は思った。

蝉が迷惑なお祝い言葉に「ジジジジジーツ」と、相変わらずやかましく鳴いていた。

しかし、所々痛かった箇所も完全にピンピンしているもので、我ながら驚いた。

母は私が入院した時と同じく、涙流しながら何かと言わんばかりに叫んで以下省略。

父も私が入院した時と同じく以下略。

そんな突如の退院祝いで、自分の足で病院の廊下を歩き、お世話になった人々に囲まれ外へと抜け出して行くと。

「叶お姉ちゃん、退院おめでとう！」

ハトビが、太陽のように明るい笑顔で、花束を渡しに来てくれた。

私はハトビと同じ目線になるまでしゃがんで、彼のおかっぱ頭をくしゃくしゃと撫でる。

実に気持ちよさそうに抵抗なく撫でられていると、また絶え間なく輝く目で私を見た。

「お姉ちゃん、公園に行こう！」

私が退院出来たことがよっぽど嬉しいのか、早速ハトビはわがままを飛ばしてきた。

だが、私は先ほどのハトビのように全く抵抗が無い。

何せ、私はハトビの家族なのだから…。

ハトビに手を引かれ、誘われた先は私が事故を起こした公園、姿形変わらぬそのままの公園に  
来た。

いつも人気のない公園だと、いつもこの公園に遊びに行くハトビは言った。

人気が無いと言う割には誰かいるのですけどハトビさん。

公園には一人の男の人がベンチに腰をかけていた。

髪は短く明るい茶髪、耳には小さなピアスを付けており、如何にも怖いお兄ちゃん。

どうやら寝ているのか、目を閉じて(それも眉間にしわが寄って怖そうである)舟漕いでいる。

そのお兄ちゃんの足下には、無数のハト達がポッポッ鳴きながらオロオロと、まるで彷徨っているようにも見えた。

…因みに今回はちゃんと灰色のハトである。

「和也お兄ちゃん、連れてきたよ！」

ハトビが少年の声より高く上げた時、仲間(と思われる)ハト達は一斉に空へ飛び立った。

羽を撒き散らしながら、猛暑ではないかと思われる晴天の空へと飲み込まれるハト達。

その羽音で目が覚めたのか、それともハトビの声で起きたのかは分からない。

ギラリとした目付きは、まるで「ガキが大声出すんじゃねえうるせえ」などと言いたげな、そんな印象があった。

とにかく、私から言えば怖いお兄ちゃんの影響そのままであることを言うておく。

「お前が西城叶か。」

だらしのないズボンのポケットに片手突っ込んで、「よっこらせ」と立ち上がる男の人。

和也と呼ばれているようで、和むと言う字なんて何一つ感じさせない、ピリピリとした緊張感を与えている。

しかし、声は低く怖いものではあるが、何処か不思議な雰囲気漂わせていた。

ハトビは相変わらずにこやかと無邪気に笑い、私は多分ひきつった顔をしていたのだろう……。半分身構えた体勢ではあったが、やがて男は私の前に立ち、視線を合わせるように上半身を曲げた。

そして、強面ではあるが爽やかな笑み。

「新しい家族か、宜しくな。」

「…へ？」

最近、脱力していることが多い気がした。

7月25日 晴れ

---

小さな子供が、浮き輪を肩にかけながら無邪気に走る姿が窓から目に映った。

そうだ、もう世間では夏休みとなっている。平日は皆勉強し、友達と精一杯遊び、その日々のご褒美としてこの夏休みがあるのだろう。

それなのに、私と来たら…っと思ってしまう。

横から吹きつける生ぬるい風は、オンボロの羽がついておりカタカタと音を立てて回る扇風機

。もう今にも死にそうになりながら、コンセントから流れる電流に急かされ風を送る。

私と和也は、送られる風を若干迷惑そうに顔を顰めて浴びていた。

後に分かったことではあるが、高島和也(たかしま かずや)と言う人は、私と正式に対面する前に何度か見ているようであった。

だったら公園に居る時、名前を確認しているんじゃないよポケエと言いたくなかったが、伏せておいた。

聞いたところによるとどうやら、私を突如退院へと導いたのも、和也の『力』を使ったとか…

。「これもハトビの力なんだよな、聞いたよな西城？」

私は首を縦に振る。記憶が確かなら、その話は日が暮れるほど長く語られたことがある。

その中には、ハトビは「他の人に不思議な力を授けることが出来る」と言った。

それが、今日の前にいる高島和也に与えたとなる。

昨日、公園の後案内された場所は『ハトビの家』であった。

こっそりと都会外れにあるのかと思えばそうでも無く、寧ろバリバリ人が川のように流れるところへと案内される。

その途中、私は今日の前にいる和也と言う青年に手を引かれながら…人酔いして吐いた。

人の目に止まることが無いような、細く暗い路地裏にその家があった。

ハトビ曰く、たまにマスコミが不思議そうな顔をして家を見上げるらしい。「入口の無い家」として有名らしいが、興味を示しに来る人などは居ないと言う。来たとしても直ぐに飽きて去るのは、人間の心理と言うものか。

しかし外側は素っ気ない灰色のコンクリビルではあるが、中はそんな気配すら感じさせない。光も窓からしっかり入っていて、過ごしやすいと思わせる。ただし、オンボロの電化製品以外は。

家に入った瞬間人酔いでぶっ倒れたら、起きたら朝となっておりこの通り、和也はそこにいた

。お互いベッドに腰掛け、若干状況が読めていなかった私に、彼は多くの事を話してくれた。

まずは私は、透明なハト…ハトビが車にひかれそうになり、無意識に飛び出して助け出したこと。

「ゆうちゃん」と呼ばれている男の子、勇太は無意識に公衆電話へ駆けより救急車を呼ぶようにしたこと。

そして和也は、私の頭からこの痛々しい記憶を消したこと。

別に名探偵とかそんな奴ではないが、綺麗に状況が繋がりに、私はハッとした。

「ハトビは何処に？」

「出かけてる、家族に連絡しに行ったと思われ。」

和也は素っ気なくそう答え、窓へと視線を移した。

話をしてみれば、和也は外見では威嚇しているようなかなり怖いものであるが、悪い人ではない。

口調も素っ気ないのもいつものことらしいが、唯一、稀に変化する表情でそう確信させた。

私が今日目覚めた時など、「起きたか。」なんてたった4文字の言葉だけの飾り無い言葉なのに、表情はかなり穏やかであったと言える。

そりゃ家に入るなり、いきなりぶっ倒れたのだから無理も無いのだけれど…。

「そう言えば、和也さんも…。」

「『さん』は付けなくて良い、寒気がする。」

「…和也も、ハトビと出会った時の記憶が無いの？」

若干余計な毒舌食らいながら、私はそう聞いた。

話によると、消した記憶は再び経験しなければ戻らないと言う。

きっと、それはハトビからの些細な気配りではあるのだろう。しかしそれは同時に、出会いの瞬間を消すこととなる。

それは勇太もそうであると言うのだから、同じなのではないか？

「ハトビと出会った記憶など、皆無い。」

和也は戸惑いもなく、ストレートに言った。そして続ける。

「ハトビの家族になった人は、皆幸せからどん底へ突き落とされた人だ。無論俺もその一人となっている。寧ろそうしないとハトビに出会うことは無いだろうな。」

ハトビは、飛び立つハトと言われている。

名前もそこから由来されたものであり、皆に勇気を与えていると言う。

和也もまた、その『どん底へ突き落とされた人』であった。

「幸せってのは本当分からない。『人生バラ色』なんて言えば、バラを持つ手には棘がある。

結局バラに行き着く前に荊道(いばらみち)ってことだな。」

ハトビは、家族への執着心が無い人へ訪れる。

勇太にはそう見えなかったものだが、どうやら父に反感を覚えている様子だと言う。

そして私もまた、その『家族への執着心が無い人』であった。

「さて、そろそろハトビが帰って来るだろうな…。」

「何をすつつもりなの…？」

和也は立ち上がり私に背を向け、怪訝な顔をして私は言う。

するとまた、穏やかな顔をした和也は振り返り言った。

「新しい家族への、歓迎会。」

そう言った青年の、笑顔は少々寂しそうに映ったように見えた。